

夢追い人列伝

その一 「渡辺一平伝」

初めに

『夢を追う』と題した「山口県バスケットボール協会60年のあゆみ」の刊行は、平成19年2月のことである。平成23年の「おいでませ！山口国体」を挟んでそれからすでに十年余が経過し、元号も平成から令和に改まった。この間の各大会における本県チームの活躍を念頭に県協会設立後の歴史を総括したこの冊子をひもとくと、バスケットボールにかける多くの先覚者たちの一途な気持ちが改めて胸に迫ってくる。

この度、県協会では本県バスケットボール競技の普及と発展に多大な貢献があった先達を取り上げ、その半生記を世に出すことにした。名付けて『夢追い人列伝』である。

『夢を追う』が編年体的な県協会の史伝だとすれば、この列伝はバスケット界を牽引してきた先人の足跡をたどった紀伝であり、両者は合わせ鏡として本県における斯界の変遷とドラマを映し出すものになるだろう。

もちろん功勞の全てに克明に迫ることは到底できないが、可能な限り活躍の姿が浮き彫りになるよう努めた。業務は県協会企画・広報部の主管とし、顕彰事業委員会を設け関係各位の献身的な協力を得て実務に当たった。したがって、本文の文章責任はすべて顕彰事業委員にある。

レジェンドともフロントランナーとも呼ぶべきこれら先覚者たちは、故人を含めて枚挙に暇がないが、その中から最初の登場者は渡辺一平氏である。

渡辺 一平 (わたなべ いっぺい)

大正14年5月生まれ・山口県下関市在住
(一般社団法人)山口県バスケットボール協会顧問
東京体育専門学校(現筑波大学)卒業
元県立豊浦高等学校バスケットボール部監督
(昭和23年4月～63年3月)



1 豊高40年

山口県バスケットボール界でワタナベ先生と言え、まずこの方を思い浮かべる。発足直後の新制高校を手塩にかけて名門に育て上げた敏腕の持ち主を、身近な方は親しみを込めて「一平先生」と呼ぶ。その卓越した指導力と緻密なチーム作りは豊浦高校だけでなく県下全域に相乗効果をもたらし、山口県高校男子バスケット界の「中興の祖」と言うべき功績を残した。

渡辺氏は旧制小野田中学校(5年制)在学時から剣道に打ち込み、昭和19年、志して東京体育専門学校(現在の筑波大学体育学群)の門を叩く。それがバスケットに転じたのは、敗戦により柔剣道の道が閉ざされ身の置き場を失った氏に周囲の熱心な勧誘があったからである。ポジションは今で言うPG(ポイントガード)でむしろディフェンスに活路を見出したそうだが、剣道の機敏な動きはバスケットの足さばきや身のこなしに通じるものがあつたのかも知れない。

昭和23年春、氏は学校卒業と同時に保健体育科教師として豊浦高校に奉職し、男子バスケット部の監督に就任した。教育実習先でもあった同校は男子校で近隣には女子校の長府高校があったが、女子生徒を教える自分の姿は思い描けなかったという。以来、氏はその教員人生を豊高一筋に送ることになる。現在ではまず考えられないことだが、常勤講師2年を含め昭和63年3月まで都合40年間を同一校に過ごしたのである。しかし、この希有な経歴なくして、語り継がれる豊高伝説もまたあり得なかった。

在任中の全国高校総体（インターハイ）出場は13回に及び、そのうちベスト8入賞が2度ある。また、当時は中国地区から2校出場の全国選抜優勝大会（3月開催）にも2度駒を進め、さらに、国民体育大会でも昭和38年の山口国体をはじめ幾度も少年男子チームの指揮を執っている。ただ、その頃の国体少年チームは、現在の「オール山口」スタイルではなく、県予選を制覇した高校単独かあるいは他校から数名の補強選手を加えて編成され、しかも中国大会を勝ち抜かなければ本国体への出場権は得られなかった。

だが、氏の人生航路は必ずしも順風満帆だったわけではない。その人ありと知られるようになるまでには、チーム作りにおいても私生活においても紆余曲折と試練があった。そもそも部活動に熱心な教員は同僚からいぶかしがられるそんな時代だった。

渡辺氏には、「豊高での40年」と題した回想録がある。平成3年から6年まで高体連バスケット専門部の機関誌『南風』に掲載された、都合16回に及ぶ自伝である。それは単なる個人の覚え書きにとどまらず、本県バスケット界の実情にふれた貴重な資料ともなっている。氏はその中で着任当初のことを次のように語っている。

練習場は旧剣道場。梁にバックボードを打ち付けて、広さは縦11メートル横22メートル、窓ガラスもなく吹きさらし、雨漏りはし、床の雪は掃き捨てた。床板を度々踏み破り、その都度自分で修理した。ボールは皮を縫い合わせ、チューブを入れて、綴ひもでとじたものを1、2個準備できる程度、シューズも不良で、1ヶ月もたたずに裏が擦り切れ、自動車の修理工場に行きゴムを焼きつけてもらった。コートには電灯がなく、夏の練習は一時間余り、冬は4時半になるとボールが見えず、短時間の練習で終わった。

劣悪を絵に描いたような練習環境を前に、それに屈せず内に情熱を秘めてコートに立つ若き体育教師の姿が目につかぶ。これこそ渡辺バスケットの原風景であり、指導の原点と言って差し支えないだろう。

この頃、渡辺氏はハンドボール出身との風説が流れた。当時はハンド部の顧問も兼任して二足の草鞋を履いていたことや、関係者の要請により何度か選手として国体ハンドボール競技に出場したせいらしいが、バスケットの国体チームはまだ誕生していなかった。ハンド部の方はもっぱら引率要員で練習にはタッチせず、一度だけ部員に頼み込まれて面倒を見たところ翌日は誰一人姿を見せなかったと言う。

昭和24年には豊浦、長府の両高校が統合して男女共学の下関東高校が開設された。昭和29年に旧に復するまで女子の指導に携わりはしたが、結局最後までなじめなかったと本人は明かしている。以後、女子を教えたことはない。

病魔に襲われた苦い経験もある。昭和28年2月に肺結核を宣告され、2年間の休職を余儀なくされた。しかし禍福はあざなえる縄の如し、逆境をバネに雌伏十年にしてインターハイ初出場を勝ち取る。昭和32年のことであった。「これが復職して3年目でやっと果たすことができた、私の夢の第一歩であった」。そう氏は述懐している。これを皮切り

に、途中三度不覚を取った以外は昭和46年までほぼ連続して全国の舞台に登場し続ける。中でも中国地区大会優勝を追い風に乗り込んだ昭和41年の秋田総体は、札幌光星高校にわずか3点差で準決勝進出を阻まれベスト4に届かなかった。氏は振り返って「ウチが優勝してもおかしくない戦況だった。チャンスはあった」と悔やむ。その後は、昭和45年に和歌山インターハイで再度4強入りに迫るも、武運拙く^{つたな}またもや涙を飲んだ。以降今まで、本県高校男子チームは全国大会準々決勝の高い壁を乗り越えられないでいる。

かくて昭和30年代の高校総体出場権は豊浦の寡占状態となる中、顧問は一人のままで孤軍奮闘が続いた。昭和37年に副顧問として片山隆剛氏が加わり目を細めたものの、それも氏の転勤で数年のことに終わった。この昭和37年は、翌年の山口国体を控えて宇部市でインターハイが開催された年である。豊浦高校は連続する兩大会に出場し、地元の声援を背に奮戦これ努めたがいずれも1回戦を突破できなかった。国体では、優勝した中大附属高校と対戦し、速攻を武器にフルコートのプレスディフェンスを繰り出して善戦するも最後は突き放された。当時の奮闘の様子は『夢を追う』への寄稿「宇部インターハイと山口国体」に詳しい。



宇部インターハイ(昭和37年)

一方、県内の有力校は、年ごとに地歩を固めていく渡辺氏に対しこぞって「打倒豊浦」を旗印に掲げた。その切磋琢磨は結果的に各校の底上げをもたらし、高校バスケット界は昭和40年代半ばから群雄割拠の覇権争いに突入する。各チームとも身体能力が高く技術的にも目を見張る選手を擁して熾烈な戦いが展開される中、豊浦高校は昭和52年を最後に全国大会から遠ざかっていくことになる。昭和55年から、OBの吉永兼夫氏(昭42卒)をコーチに迎えて指導体制の強化を図り、中国大会では常連校として毎年のように上位入賞を果たすものの、全国大会の舞台に再び咲くには昭和61年の全国選抜大会まで待たねばならなかった。

その昭和61年は折しも渡辺氏の定年退職の年であったが、常勤講師として継続の要請があり、豊高での勤めに終止符を打ったのは昭和63年3月末だった。着任以来40年が経っていた。バスケット部監督は転入した教え子の原守彦氏(昭52卒)に委ね、やがてそのバトンを受け継いだのがやはり門下の辣腕・中村浩正氏(昭58卒)である。

しばらく臥薪嘗胆の時期を経て豊浦高校が全国大会で再びその勇姿を見せるのは、平成10年のことになる。現在は教員団の好ガードだった枝折康孝氏が古豪のベンチを預かり快進撃を続けているが、選手が汗を流す体育館には今もその一挙手一投足を鋭く見つめる渡辺氏の姿がある。

2 学ぶ

渡辺氏は、新しい練習方法や戦術などを意欲的に取り入れることに熱心だった。しかしながら、コンピュータなどで容易に情報や知識が得られる今日と違い、当時はそこに抜きがたい困難が横たわっていた。それでも氏の探究心はあくまで旺盛で、現状に満足することを是としなかった。

昭和32年、県協会がアメリカ人指導者ナット・ホールマン氏を招聘し3日間の技術講

習会を米軍岩国基地で開催した。勇躍参加した渡辺氏は、「米国人からの指導は初めてで、参考になることが多く、シザースプレイについては特に印象深く、その後のチームオフenseに取り入れた」と述べている。また、昭和39年には、東京オリンピック出場の全日本チームに対するピート・ニューエル氏の指導を実地見学に出かけたり、当時の全日本チームのコーチ吉井四郎氏や高校界の雄・能代工業高校の加藤廣志監督を訪ねて直接指導を仰いだりした。能代工については「選手をしっかりと鍛えている」練習風景を目の当たりにし刺激を受けたとインタビューに答えている。

さらに、全国大会への出場に際しては強豪校の戦いぶりをつぶさに観察して指導の糧とするとともに、人脈の開拓にも余念がなかった。渡辺氏はインタビューでこうも語っている。「試験中など時間が取れる時は、指導者講習会に行き講習を受ける傍ら、機会があれば講師や参加者に個人的に話を伺うよう努めた。また、全国レベルの大会に行き名の知られた高校のゲームを見て研鑽に励んだ。こうしたことは経費がかかるので、給料の一角を貯金しておいてそれに充当した」。備えあれば憂いなし。抜かりなく得点しほころびなく守る豊高チームを彷彿とさせる逸話である。

地の利を生かして長期休業中には福大大濠高校など九州地区の強豪チームとも積極的に交流し、遠征や合同合宿も頻繁に実施した。3市持ち回り開催の「関門大会」（現モルテンカップ）は、こうした機縁が基となって生まれた高校男子の錬成大会であり、その創設に当たっては渡辺氏の尽力が大きかった。

3 組織の担い手として

渡辺氏の目は、県全体のレベルアップにも向けられていた。そのためには組織体制の強化が欠かせない。その思いを胸に、氏は着任して間もなく県協会のメンバーに加わり早い段階から技術委員長の大任を担うとともに、高体連専門部の業務にも精力的に関わった。また、試合の度に公認審判員の一員として笛を吹き大会運営を支えた。

前述のように、昭和37年には宇部市で第15回全国高校選手権大会（インターハイ）が開かれた。当時は、今のように集約的に各種目を開催する拠点スタイルではなく、種目ごとに開催地を決定し実施する分散方式だった。渡辺氏は、当時の専門委員長柏村勝氏とともに関東各県の高体連責任者を訪ねてインターハイ招致の要請に回り、その甲斐あって宇部大会の実現にこぎ着けた。翌38年は第18回山口国体の年に当たり、バスケットボール競技は宇部市と防府市を会場に開催された。

この2年続きの全国大会で県協会、専門部とも多端の折、昭和36年度末に柏村委員長転勤の報が降って湧いた。時が時だけに予想外の事態で、その余波を受け渡辺氏の異動も取り沙汰されたいが、結局は沙汰止みになっている。

また、この頃は県協会も専門部も財政的に苦境を抱え、大会役員は手弁当が常だっ



ガリ版刷りの県協会誌

た。協会の資金作りに向け、オリジナルタオルの製作販売や機関誌発行が行われた。特に後者は、活動資金の捻出とともに競技の普及・向上に資する画期的な企画であり、実務は技術委員長を務めていた渡辺氏に託された。片山副顧問によるガリ版印刷・製本という助力も得て、冊子は昭和41年から48年まで年2回発行され好評を博した。先の『南風』の前身はこの協会機関誌になる。

昭和51、53年には、国内各地で行われた「日米高校定期戦」が山口市でも開催された。これを契機に高体連本部とバスケット専門部との意思疎通が図られ、結果的に財政事情の好転に結びついた。この頃、渡辺氏に県協会理事長就任を要望する声が上がったが、本人は業務の円滑な遂行には県央部在住者が適任との考えがあり、実現には至らなかった。昭和53年度末には、若手の台頭もあって協会役員の新旧交代が図られ、中核メンバーのほとんどが第一線から退くことになった。渡辺氏は副会長に就き平成16年まで務めた後、現在は顧問として諸活動を側面から支援している。



昭和51年 日米高校親善試合プログラム



昭和53年 日米高校親善試合プログラム

なお、氏の永年の貢献に対する褒章、叙勲等については、昭和55年の体育功労賞受賞をはじめいくつもあるが、本人は全く意に介されていないようであり本稿では割愛させてもらったことをお断りしておく。

4 師弟同行

「好事門を出でず」と言う。しかし、渡辺門を出た教え子はいかにも多い。大学、実業団、クラブチームなどで目覚ましい活躍をした逸材は目白押しであり、国体成年男子チームや教員団の中心選手として大いにチームを牽引した。

全国に名を残した卒業生も少なくない。中でも渡辺氏が「最高のプレイヤーだった」と振り返る昭和48年卒の玉井和典氏は、東京教育大学（現筑波大学）に進学しキャプテンも務めるなど活躍した。その後、当時の日本リーグの名門チームである日本鉱業に入社し、ここでも主将を任され、全日本選手権大会などで華麗なアウトサイドシュートを披露したが、体格的には華奢で体力も恵まれた方ではなかった。ただ、ひたむきな努力家であり、その意味で渡辺氏直伝の「豊高魂」を体現したスーパープレイヤーだと言える。因みに、玉井氏は日本代表選手に選出されている。

豊高魂の継承者の一人には、昭和43年卒の藤井房雄氏の名も挙がる。氏は昭和54年夏、身を置く下関市立彦島中学校を率いて松江全国中学校選抜大会に臨み、快進撃の末に堂々優勝の栄冠に輝いた。この快挙に渡辺氏は「自分が勝つ以上に嬉しかった」と賞賛している。出藍の誉れ高い本県初の全国制覇であった。

また、昭和41年卒の小林正氏は全中大会での準優勝二度、小西哲也氏（昭49卒）は同じく3位二度、他にも池藤明氏（昭56卒）、中村昇氏（同）、重田稔氏（昭57卒）が3位入賞の輝かしい戦績を残し、渡辺門の面目を高からしめた。

40年と言えば長いですが、私にとっては短かった。あの古い旧剣道場の片隅で、タオルを水に濡らし、水を飲まずに汗と水のタオルをしゃぶり、何でもできる自由な青春を、

頭を丸め、精神的な苦痛を乗り越え、遊ぶことも忘れ、勉学とバスケットに過ごした部員の努力に敬意を表したい。私も生徒のその努力が報われるように無駄な時間を過ごすことなく、また、体育館を遊ばせることもせず、毎日メニューを変え、計画を立て、楽しい中に激しさと集中力のある練習をと心がけた。放課後できるだけ早く服装も練習用に整え、椅子に座ることも、途中休憩もせず、練習コートから離れることもしなかった。

「豊高での40年」最終回（平成6年1月）に載った回想である。

師弟同行。渡辺氏のチーム作りに臨む姿勢を要約すればこの言葉に尽きよう。生徒と共に努め、選手と共に伸びる。チームとの関わりで個人的な都合を優先したり公平をないがしろにしたりした覚えは全くないと胸を張る。それでも、数多い部員の中には練習と勉学の両立かなわず、道半ばでドロップアウトした者も当然いる。

しかし、3年間を部員として全うし卒業した生徒も多く、私の40年間で合わせて270名に達し、豊浦の1学年の卒業生に相当する。

卒業式に、卒業生代表として答辞を読んだ部員も5名を数え、大部分は勉学と部活を全うして卒業した。

.....

（今日）バスケットの指導に携わっている方も30余名、立派な選手を育て、良いチームを作り、バスケットの発展に寄与してくれるものと期待している。

今も最前線で日々汗を流す方々のお名前をいちいち挙げるのは控えるが、いずれ劣らぬひとかどの指導者ぞろいである。その豊かな風土を生んだのは、「春風の中に座するが如し」渡辺氏の厳しくも心あたたかな指導だったと思えてならない。

終わりに

——山口に豊浦あり。陣容整わず低迷苦戦を強いられた時期もありつつ、今もって中国地区や全国大会でその名が語られる豊浦高校バスケット部は、渡辺一平氏の手によって拓かれた。戦後間もなくの教壇に立ち寒風すさぶバスケットコートに身を置いた青年教師は、比類ない情熱をもって選手を育て上げ、本州西端の一新制高校を屈指の名チームに成長させる。ライバル校との切磋琢磨は、県全体のバスケット技術の底上げと競技ムードの醸成に大いに寄与し、そのバスケット熱の高まりと広がりがあまねく競技力向上をもたらした。各カテゴリーで時折々に登場した好チームも、そのおおもとは多く豊浦高校に根ざしていよう。渡辺氏の骨身を惜しまぬ貢献と功績を抜きに、本県バスケットボール界の歴史と隆盛を語ることはできない。アルコールもほとんどたしなまない氏だけに、「趣味は」と問われれば、ためらいなく「バスケット」と返事があるに違いない。



一つの逸話が「豊高での40年」にさりげなく載せられている。

昭和62年の沖縄国体に初めて奥方同伴で応援に出かけた折のこと、当地在勤の教え子諸氏がホテルを用意し、その上、石垣島、竹富島までお二人を案内したそうである。思えば氏の40年はまた、奥様の深い理解と献身あつての歳月であつたに違いない。一平先生ともども奥様の一層の御健勝をお祈りしてやまない。

[文責：顕彰事業委員会]